



第一
号

平成二十九年
度総会特集

小農学会 平成二十九年度総会

■日時 四月二十三日(日) 午後一時～午後五時
■会場 福岡大学 A棟地下1階 AB01教室

〈総会次第〉

○ 共同代表挨拶 萬田 正治 (鹿児島大学名誉教授)

山下 惣一 (農民作家)

○ 会計・活動報告など (事務局より)

○ シンポジウム 「小農こそ世界の流れ」

「都市と農村が支え合う」

川口 進さん (井原山田緑プロジェクト事務局)

「兼業農家として村に生きる」

立花 智幸さん (兼業農家)

「小農の暮らし、生活を考える」

古野 隆雄さん (有機農業)

○ 特別報告

「忘れられた人類学者(ジャパノロジスト)

〈エンブリー夫妻が見た〈日本の村〉〉

田中 一彦さん (元西日本新聞記者・ジャーナリスト)

○ まとめ 副代表 徳野 貞雄 (熊本大学名誉教授)

○ 閉会挨拶 副代表 八尋 幸隆 (有機農業)

小農学会 平成 29 年度 総会 & シンポジウム 「小農こそ世界の流れ」

■日時 4月23日(日) 13:00～17:00

■会場 福岡大学 A棟地下1階AB01教室

地下鉄「南天神駅」から乗車、七隈線「福大前駅」で下車し、1番出口です。

総会

あいさつ 萬田正治 鹿児島大学名誉教授
山下惣一 農民作家
(事務局より) 会計並びに活動報告など

シンポジウム

小農こそ世界の流れ

「小農の暮らし、生活を考える」

古野隆雄 (有機農業)

「都市と農村が支え合う」

川口 進 (井原山田緑プロジェクト事務局)

「兼業農家として村に生きる」

立花智幸 (兼業農家)

(進行)

梅村幸平 (梅村制作室)

特別報告

忘れられた人類学者(ジャパノロジスト)～エンブリー夫妻が見た(日本の村)

田中一彦 (元西日本新聞記者・ジャーナリスト)

■資料代 1,000円

小農学会 事務局 (門田)

〒899-5301 鹿児島県姶良市蒲生町漆 780 TEL 090-3014-5965 kadota@posynapse.ne.jp

シンポジウム事務局 福岡大学経済学部 (辰巳)

〒814-0180 福岡市城南区七隈八丁目 19 番 1 号 TEL 092-871-6631 (ext.4215)

小農こそが生きる希望。日本の、世界の村と農業を救う……。平成29年度の総会は昨年4月23日、福岡大学で開かれました。遠くは京都や四国などからも1000人をこす百姓や研究者らが参加、熱心な議論が展開されました。「小農こそ世界の流れ」をテーマにしたシンポジウムではNPO事務局の川口さん、兼業農家の立花さん、有機農業の古野さんらが登壇、それぞれの実践を報告いただきました。また、田中さんには自身が書かれた本に沿って村の暮らしについて語っていただきました。総会の模様を報告します。

◆ 萬田 正治 共同代表



小農学会を立ち上げて1年半となりました。この間いろんな反響をいただいたわけですが、なかでも一番驚いたのは「小農」という言葉が広がったことです。当初、私自身は「小農」という名で立ち上がることに若干の逡巡があつたのですが、共同代表の山下惣一さんが、この「小農学会」という名称にこだわられた。今では、山下さんの感性の鋭さに脱帽しています。

3月には、鹿児島で第1回の現地検討会を開きました。本当にやって良かったと思つた。なぜよかつたかという点、訪ねた橋口さんの農園は家族経営であり、兼業であり、そして後継者も立派に育っている、というように素敵な小農であることに間違いはないのですが、それ以上に私が感銘を受けた点が二つあるのです。一つは野菜の出荷を通じて地域の農家をまとめて共同出荷をしていることなど、地域といろいろな関わり合っている姿です。もう一つは周辺の都市生活者約40人を集めて体験農園をしていらつしやる。ここの運営は橋口さんの長男夫婦を中心に行つておられたのですが、その様子を見て小さな発見をしたわけです。参加した40人の方々は第二次、第三次産業に従事し

ていらつしやる方々ですが、週末に体験農園に関わり、畑を作つていっているという意味では、この人たちも小農と呼んでいいのではないかと。橋口さんという立派な小農と都市生活者が一緒になつて新しい小農の姿を作り始めているという発見です。

あまりいい言葉じゃないが、安倍総理の言葉に「攻めの農業」というものがあります。私は小農を守るという守勢的な姿勢ではなく、積極的に新しい小農の道を切り開いていくんだというふうには考えれば、これこそが真の「攻めの農業」なのではないかと、第1回目の現地検討会を通じて確信した次第です。

本日のシンポジウムのテーマは「小農こそが世界の流れ」です。決して大風呂敷を広げているわけではありません。すでに3年前、皆さんもご存知のように国連が「国際家族農業年」を定めました。まさに小農は世界の流れなのです。本日はこのテーマに沿つて忌憚のない議論をしていただければありがたいと存じます。

◆ 山下 惣一 共同代表



小農学会に入られた方々のなかには、学会はいったい何をやっているのだらうかと、思つていらつしやる方がおられるかと思ひます。私の個人的な意見ですが、この小農学会というのは小さな農家が

集まつて何か行動を起こすということではなくて、農業は小さい方がいいんだ、兼業でもなんでも構わないから豊かな暮らしをするには小さい規模がいいんだということを、いろんな屁理屈、小理屈を動員して議論し、そして自信を持つて生きていくということをや、みんなで確認する場だと思つています。

萬田先生も触れられたように、第1回の現地検討会で橋口さんのところに行きました。そして、感動しました。私は80歳になるまで百姓として生きてきましたけれども、社会運動として農業をやっている人に初めて会いました。農業を通じて世の中を変えていくんだということです（詳しくは49ページに掲載の全国農業新聞のコラム「本音のホンネ」をご覧ください）。

今、後継者となつていっている息子さんは以前、百姓は嫌だと出ていくつもりだったそうです。それが九州大学農学部院生の時に半年間ドイツに研修に行つて、そして、世界観が変わつて帰つてきた。卒業後、パーマカルチャー（多種作物農法）を学んで指導員の資格もとつた。お嫁さんになつた人はマクロビオティックを学んでいる。この二人が後継者になつたわけですから、どんなことがあつても簡単にやめることはないということです。

日本では産業化、効率化、大規模化ということばかりが聞こえてくるものだから、小さい農家はどうしても不安になつてしまひます。しかし、世界の流れはそうじゃないんだということを勉強して、しっかり理論化していこうというのがこの「小農学会」です。本日のテーマはまさにこのことですので、最後までご参加ください。

シンポジウム

「小農こそ世界の流れ」



「都市と農村が支え合う」

井原山田縁プロジェクト事務局

川口 進さん



本日、「井原山田縁プロジェクト」という私たちの活動を紹介させていただくことを光栄に思います。今年でこの田縁プロジェクトも14年目となりました。この活動も小農の一つの形と

してとらえられるのではないかと考えています。県職員になって35年目となりました。前半の20年間は農業改良普及員として現地を回りました。宇根豊さんにあこがれて普及員になったこともあって、減農薬に取り組んだり、合鴨水稲会の事務局を引き受けたりしましたが、そんななかで気づいたことがあります。

それは、「農業問題は農家の問題ではない、消費者の問題である」ということです。よく考えれば分かることで、全人口のわずか2く3%しかいない農家をいくら激励しても、残り97%の消費者が動かないかぎり変わりようがないのです。

そこで、農業改良普及員として食育や地産地消に力を入れていました。直売所にも取り組んだのですが、JAから「直売所をやるから野菜の値段が下がる」と言われたこともあったのですが、今では直売所も定着して地産地消も進んできました。でも、今、改めて振り返ってみると、果たして消費者を動かすことができたのかと思います。消費者は消費者である限り、なかなか変わらないのです。顔の見える関係を作ることによって食育とか地産地消に取り組んできたのですが、やはり伝わるものには限界があると感じています。一方、農山村を見てみると、あつちを見てもこつちを見ても80歳を超える人が農業の主体で、なかなか後に人が続く人もいない。もはや農家だけでは農山村は守れなくなってきたということを感じています。

では、どうするか。山下惣一さんが「市民皆農」という本を出していて、これだ、と思いました。どんな形であれみんなが百姓をする。97%の消

費者が消費者を卒業する時だと思いました。田縁プロジェクトはその一つの手段だと考えます。

井原山田縁プロジェクトの合言葉は「田んぼの縁で地域と、そして時代をつなぎます」というものです。井原山集落は糸島市の中でいちばん高齢化率が高いところです。農業改良普及員になったときの初任地が糸島農業改良普及所で、この井原山集落で減農薬研究会などをやりました。それから15年くらい方々を回ったあと、当時の人たちと会う機会がありました。すると、皆さん80歳近くになっていて、田んぼを継ぐ者がいないと口々に言われる。現地には耕作できなくなった田んぼがたくさんありました。そこで、取り組むこととなったのですが、私たち非農家では田んぼを借りられない。まずは地元で「棚田を守る会」というのを立ち上げてもらって、田んぼの持ち主と貸借を結んでいただいた上で我々に作業委託してもらおうという形をとりました。それと合わせて、地元の農家に味噌作りなどを習う場もつくってプロジェクト全体を進めています。

本日も配りしたパンフレットにもある通り「週末は山と田んぼと野良仕事」をキャッチフレーズにして毎年、米づくりサポーターを募集しています。条件は大きく二つ。年会費は家族単位で5,000円。もう一つは年に最低1回は農作業に出てもらおうということです。サポーターの特典としては、3haくらいの圃場で作った大豆やお米を買うことができます。会員じゃないと買えません。いろいろなイベントにも参加できます。そして、一番、人気があるのが、農作業に参加すると地域通貨がもらえることです。これは農産物

の購入やイベントの参加費に使えるほか、糸島市内の提携店で食事や買い物に使える。この地域通貨は「ぎつとん水車」と言っていますが、地元の「ぎつとん水車」から命名しました。1枚500円相当です。井原山以外ではただの紙切れですが、私たちが参加者が確かながつているなあと気がしています。ぎつとん水車は決して労賃などではなく、感謝の気持ちとして手渡しています。ただ「ありがたい」と言われるだけよりも、実物があるといい。ついでに子どもたちは、5分と仕事はしないのですが、いるだけでいい。賑わいが出てくる。地元の人たちにも子どもたちがくることを喜んでいきます。ですから、子どもたちにはにぎわい賃としてお菓子をあげています。また、子どもが大人を連れてきてくれる効果もあると思っています。

地域通貨の仕組みです。サポーターさんಗಳು、農作業1回あたりぎつとん水車1枚を差し上げます。それで、ここでできた農産物を買えますし、協力店で金券として使えます。協力店にはそれを事務局に持ってきてもらって換金する、という仕組みになっています。協力店は糸島市内のハーブレストラン、雑貨店、地元の小さな直売所、ワインショップなど5店舗。これらの店は私たちの会員でもあり、その店を応援するという意味もあります。

プロジェクトの体制としては、事務局、でんえん隊、サポーターの三つです。事務局は私を含めて4人で、代表の井上さんは地元の農家、地元との様々なやりとりを引き受けてもらっています。他に私と俣田さんという女性。それと通信やブ

ログを担当する南さんです。

でんえん隊は農業機械を使うことも多いので、その作業をやっていただけの方。それとイベント開催などのノウハウにたけた方たちにお願いでおり、その人たちはぎつとん水車を1回につき2枚差し上げています。

サポーターは毎年150家族で締め切りをさせていたでいます。今年は現時点で、148家族。参加者は昨年の実績では大人で延べ1,700人、子ども300人で合わせて約2,000人となっています。

次に活動内容です。全部で32枚、約3haの棚田を預かっています。そこで作物を作りながら農地を守っています。いちばんの作物は米。21枚、2haの田んぼで約7トンを作っています。刈り取ったコメは掛け干し後、脱穀、籾摺りをし、て会員だけから予約を取って販売します。10月に先払いで予約していただいて、11月から毎月宅配するか、ハーブレストランで玄米あるいは白米で引き渡します。次に、大豆作り(7a)です。大豆は味噌を作るために作るのですが、早めに稲刈りの時に枝豆としても食べています。また野菜は57a、年会費10,000円の市民農園方式で、野菜を作りたい人に作ってもらっています。

また、「文化をつなぐイベント」では、手前味噌づくりとして1月に味噌を作る。これも先行予約をとって、毎年全量を買って上げてもらっています。餅つきは毎年12月23日で、そのほかいろいろ遊びも行っていきます。

田んぼは、瑞梅寺川に沿って集まっているので作業はやりやすい。今32枚の田んぼを預かって

いますが、私たちが預かっているなければ、恐らくすべて耕作放棄地となったことでしょう。1枚が小さく、いびつな形が多いので誰も借り手がいないのです。

米は無農薬でつくっています。最初4、5年は除草に苦労したのですが、ジャンボタニシをうまく使えるようになって人手があまりかからなくなってきました。ただ、ジャンボタニシを使うためには、田んぼを均平に保つ高低直しが大変で、冬の間の主な作業となっています。先に触れたように、年間2,000人くらいが訪れて田んぼ周辺を歩き回るので畦がよく壊れます。この畦の補修も大きな仕事になっています。4〜7月は種まき、苗作りと進み、手で田植えをします。そして、田植え後にはガンツメ(田ぐるま)押しをしますが、最近ではジャンボタニシのおかげでこの作業も少なくなりました。夏場から秋にかけては毎週末に必ず作業をします。大豆の種まきや電柵張りのほか、レクリエーションを兼ねて案山子作りも行っています。稲刈りはすべてバインダーです。そして掛け干しにします。

うるち米は3品種。早生、中生、晩生と時期をずらしながら収穫します。11月には米を渡すのも兼ねて収穫祭を行っています。収穫祭はまず地元の神社の清掃をしてからお参りするので、毎年100人くらいが参加。神社もきれいなって、地元の人にも喜んでいただいています。12月23日には毎年約200キロのもち米を使って餅つきをします。1月は手前味噌づくり。味噌づくりも機械を使えばすぐできるのですが、私たちは敢えて煮大豆を手で潰しています。敢えて

手のかかることをする。「だから手前味噌になる」と実感してもらっています。

うちの強みは、ある程度運営費を稼ぐ態勢ができていくということです。こんな活動はなかなかボランティアでは続かない。やっぱりいるところにはお金がいります。そこで、できたものは会員さんに買い取ってもらいます。田縁米は家庭用はポリ袋入りなのですが、11、12月は贈答用として紙袋に入れて販売します。これが大変人気で、半分くらいはこの時期に売れてしまいます。ペットボトルに入れている黒米も人気です。そのほか、大豆や芋けんぴも。

米は会員限定で販売しており、価格は玄米5キロ2、600円、白米5キロ2、800円。毎年、米の売り上げだけで350万〜400万円くらいの売り上げがあります。その他、イベントなどで100万円ぐらいが入って、会費は150家族分の75万円。合わせて年間500万円超くらいで運営していることになりました。

会員との通信手段はメールです。会員はメールを伝える人に限定しています。なぜかと言うと、なかなか田んぼにこれがない人へはどうしても情報提供が少なくなってしまう。すると、参加者意識が希薄になってしまう。また、天候などによる作業予定の変更などにもすぐ対応できる。毎週、月曜日の夕方には「今週末の農作業の予定」をお知らせします。これで作業内容が分かる。どんな作業をするのかを見て、面白そうだなと思っただけで参加してもらえないように工夫しています。いろんなお知らせもその場にに応じて発信しています。会員専用のホームページも作成して

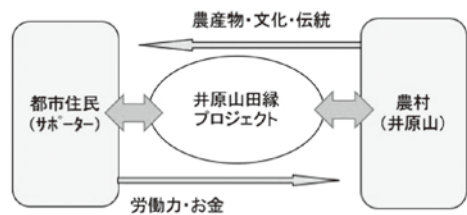
います。この中の「かぼちゃ通信」は毎月1回、私が書いており、230号ぐらいになりました。そのほかお知らせや野菜づくりの会員向けのものなどを載せています。こういうのを維持するのは大変ですけど、150家族の中には特技を持った人もいらっしやるので、うまくその人をスカウトしてやってもらっています。

また「田縁日記」というのもあって、毎回作業が終わったら写真と簡単な報告とともに上げていきます。これは一般の人も見られます。

このプロジェクトも今年で14年目になります。よく続いているなと思っています。私たちは「ブチ百姓」と言っていますが、どんな形であれ百姓になった気分を味わってもらえるようにいろいろ知恵を出してやっているとこです。市民が参加したくなる仕掛け作りとして、まずは「自産自消」と言うことです。野菜の場合は市民農園などで自分で作れますが、米づくりはなかなか難しい。最後に、農業をしたいという人はたくさんいると思うし、むしろ増えてきていると思います。ただ、ハードルが高いですね。土地もないし、技術もないし、道具もない。ですから、1から10までできる機会を作るということで、こういう仕組みを作りました。こんな新しい小農の形があってもいいのではないかと思っています。こんなことをコーディネートする力があれば、どこの農山村でもできるのではないかと思っています。

◆井原山田縁プロジェクトが目指すもの◆

私たちは、「田んぼの縁」で地域と、そして時代をつなぎます！



地域通貨「ぎっとな券」は、感謝の気持ち！

～たかが500円、されど500円～



・田んぼや大豆畑等のサポート1回につき、1枚を差し上げます(高校生以上)。

・500ぎっとな=500円として換算し、井原山で行うイベント参加費や農作物の購入費として利用できます。

・もちろん井原山以外では、ただの紙切れです。

・子どもには、1回につき一袋のぎっとなお菓子(100円分)を差し上げます。

4月～7月は、種まき・田植え・草取りで大忙し！



田植え前の井出上げ作業も重要な作業



種まき、苗箱の搬入付けもたくさんのサポート！



田んぼの形がいびつなため、手植えが必要



条間・株間を草押し機(ガンズメ)で草取り！

たわわに穂りました。いよいよ稲刈りです！



バインダーの力を借りて、稲刈り



天気良ければ、翌週には脱穀・ワラ敷きです



サポーターの力ですべて天日干し、地元でも 風物 神に！

◆会員のみが購入できる農産物・加工品◆

・すべて、自分たちが育てた無農薬・有機栽培の農産物です



田縁日記

August 2012 | 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20 21 22 23 24 25 26 27 28 29 30 31

2012.08.05 Sunday
*かかし立て



今日もいい天気！朝日を浴びながらのかかし立ての作業です。



「そら」で草刈機の音が響くなか、たくさんのおんぼたちが気持ちよさげに飛んでいました。

「兼業農家として村に生きる」

兼業農家・立花智幸さん

私は別に特筆すべきことをやっているわけではなく、市役所に勤めながら田んぼを作っている普通の兼業農家です。農業をしているのは福岡県のほぼ中央部の遠賀川流域、田川郡の福智町です。地域の特徴としては、明治中期から石炭が出ていて、その頃から百姓をしながら炭鉱に潜ったり、炭鉱関連の仕事をしている人が多く、ほとんどが兼業です。うちの集落はほとんどが昔からある家です。人口はどんどん減っているのですが、世帯数はそんなに変わっていません。集落の3地区で230世帯があるのですが、廃屋などになっっている家はありません。もちろん、農家は減っています。兼業をやめる人が増えているのです。このあたりは炭鉱の影響で地盤陥落が発生しました。そこに土を入れて現状に復しているのですが、そのときに耕地整理も一緒にしています。以前は曲がりくねった湿地の田んぼで生産高も高くなかったのですが、排水がよくなって収量も上がるようになりました。

私の経歴です。昭和30年10月に兼業農家の長男として生まれました。父親は農林省の技官で米の検査官をしていましたが、昭和45年交通事故でなくなっていました。それで、翌年からは自分が田んぼを主に担ってきました。祖父の兄弟が8人いて、それぞれが田んぼを作っていました。昔は手作業による田仕事だったので、田植えも稲刈りもみんな作業しており、子どもが手伝うの

も当然でした。自分も小学校の時から手伝いを
していましたが、そんなに苦ではなかった。田ん
ぼで食べたご飯などは大変楽しい思い出です。

高校の時も学校から帰ってきてすぐ田んぼを手
伝わされたけど、それほど辛くはありませんでし
た。ただ、兼業農家というのが嫌いでした。父
親の仕事が8時半から4時半で、4時半から遅く
まで手伝わされたのですが、百姓にはなりたくな
かった。大学は鹿児島大学に進み、建築を学んで
卒業後、建築の道に進みました。昭和57年には地
元に戻り、市役所に入って土木関係の仕事をして
きたのですが、昨年、定年退職後、再任用で今も
市役所に勤めています。

親父の代にあった田んぼは約2反3畝でした。
私の代、平成8年になって祖父から相続して3反
6畝になり、その後購入して、今は1町2反9畝
となっています。そのほか、周りから作ってくれ
と言われることも多く、7反を小作しています。
作付けとしては、手のかかる野菜などはできない
ので、米、麦、大豆をブロックローションで
作っています。大豆と麦は一昨年くらいから始
めました。それまでは合鴨で米を作っていたの
ですが、地域をブロックに区切り、転作作物を回
していくのは強制となつていたので、仕方なく大
豆と麦を作っています。大豆と麦は無農薬で作
るのが難しく、収量も少なく手間だけかかるとい
うことで敬遠してきたのですが、仕方なく作って
います。すべての作物は基本的に無農薬、無化学
肥料です。

昭和60年くらいまでは慣行農法でした。ある
時、職場に農薬をかけるので早く帰ってくるよう

に、という家からの電話をもらったことがありま
した。仕事が忙しい時で、そうやすやすとは帰れ
ない。だが、共同防除をしていたので、自分が作
業に出ないと他人に迷惑をかけてしまう。そこ
で、そのまま農薬の散布をやめたわけです。

無農薬のつもりだったが、ある人から除草剤を
使っているんじゃないかと言われたことがありまし
た。除草剤もやめたら、草がぼうぼうになつてガ
ンヅメでも菌が立たない。それまで反当たり8
俵くらいとれていたのが、5俵まで落ちてしま
いました。どうしたものかと考えていたのですが、
平成3年に桂川町で合鴨サミットが開かれること
になり、自分も参加しました。感動しました。
そこで半信半疑でしたが、翌年から合鴨農法を始
めたわけです。2年目くらいまではそこそこで
きました。犬やイタチ、鳥とかに悩まされまし
た。集落で合鴨農法をやっているのは自分1人
だけでしたが、3年目くらいに1人に声を掛けら
れて、一緒にやるようになりました。平成8年か
らは、古野隆雄さんと共に合鴨米を使った酒
「二鳥万宝」をつくっています。以来、毎年4月

の第2日曜日に蔵開きをして、試飲会をしていま
すが、今年は約280人の人が参加されました。
次に地域との関わりです。先に触れたように
うちの集落は人の移動があまりありません。そ
ういうなかで昔からみんなで取り組むという習
慣、考え方がありました。集落の中には「いちば」
という地区と、七区と八区が合併してできた「七
八両区」という地域があつて、ここは法人化され
ています。約195世帯、現在、農家は72軒、そ
のなかで専業農家は6軒、その専業は梨農家です

が、あとは兼業です。現在、私自身は地区の役員
として村と関わっています。62歳になりますが
やっと洩垂れ小僧から若造になつたぐらいで、ま
だまだ年寄りが頑張っています。80歳過ぎて頑
張っている人もいますが、跡取りがいません。今
のお年寄り皆さん元気なんです。75歳になつ
たら役職はしないと言つてグラウンドゴルフを楽し
んでいます。農業関係の活動としては、用水路の
管理や清掃、地鎮祭などをやっています。もう一
つ、「いちば地域資源保全会」という農水省の多面
的機能支払交付金を受け取るための団体をつくつ
たのですが、ここでは小学校5、6年生とともに
田植え、稲刈りなどの農業体験をしています。

兼業農家という響きがいいですが、私は子ど
もの頃から嫌いでした。農作業の手伝いが忙
しくて、友達は遊んでいるのに自分は遊べない。
みんなに人気のあつた夕方のテレビ番組も見られ
なかった。しかし、修学旅行先でご飯の味に違和
感を覚えたのです。普段食べている米がこんな
に美味しいものだったことに驚愕しました。そ
の後、高校生の時に有吉和子さんの「複合汚染」
という本を読んで、食の安全性に不安を感じまし
た。建設業界に就職したのですが、過酷な労働条
件と先行きに対する不安を覚えました。家族と
離れて全国を転々とするような暮らしが、果たし
て人間の暮らしだろうか疑問に思つて、実家に
帰ってきました。帰ったら農作業は機械化が進
んでいまして、米作りも楽でした。農業も楽しい
と思つて続けるようになったのです。今は合鴨
農法に出会つて米づくりの楽しさに気づきまし
た。やはり楽しくないと続けられないじゃない

かと思えます。経済的には合わないことも多いのですが、物を作る、作物を作る楽しさと食べ物
の安全、これが兼業農家を続ける一番の意義じゃ
ないかと思えます。

大規模農家には難しくても、小農には自分が食
べる分、地域を賄える分を作っていくことができ
る。そのためには兼業農家を潰さないで、集落に
人がいるという状態を続けていくことが大事な
んだと考えます。集落を守るために、小農を潰さ
ないことが重要です。



「小農の暮らし、生活を考える」

有機農業・古野隆雄さん

小農の技術

「技術」「価値観」「制度」の三つが変わる時、時
代が変わるそうです。これまでの小農学会の「話」
は、価値観や制度の話が多かったのではないで
しょうか。

確かに農業は時代の「価値観」や「制度」に翻弄
され続けています。

昼間、近くの村の中を歩いても、ほとんど人に
会うことがありません。高齢化、後継者不足が進
み、家の中に居るか、デイサービスに行っている
ようです。みんなが言っています。「あと5年も
すれば、村で農業をする人は激減する」…。

私は農業委員をしています。仕事は大規模農
家に農地が集積するようにすることです。地域
の多くの小農が農業を継続できるようにするよう
な公共的な面は少ないようです。国の政策だか
ら仕方がないのでしょうか。

今まで経験した事がないことが、今、地域で起
こっています。このままでは、村や地域がなくな
るのではないのでしょうか。人が地域であり、人が
村です。

もちろん、私も時代の波に翻弄されながら、40
年近く小規模家族農業を続けてきました。それ
は、次々に現われる問題を試行錯誤して一つ一つ
解決し、自分なりの「技術」を作っていく、苦しく
て、楽しい日々でした。

「制度」や「価値観」と違い、「技術」は自分の目

で観察し、自分の耳で聞き、自分の頭で考え、自
分の手で作ることができます。

技術の創造こそ有機農業の醍醐味でした。お
かげで自分の仕事に限りなく面白くなりました。
いろいろありますが、小さな農業を続けるため
には仕事に面白くないことが重要です。

以下は私の試行錯誤です。

合鴨水稲同時作

私は1988年から合鴨水稲同時作をしてきま
した。中国人がアヒルを作りだしたのは3、00
0年前とか4、000年前と言われています。以
来、アヒルは田んぼや池など野外で飼われてきま
した。

一方、私がしてきた合鴨水稲同時作は、田んぼ
を電気柵や網で囲い込み、合鴨の雛を放していま
す。この囲い込みに大きな意味があります。囲
い込みがないのは畜産の技術で、餌を得るための
技術であり、伝統的な方法です。これは1960
年代まで中国、ベトナム、フィリピンなどで行わ
れてきました。一方、囲い込みをすると稲に対す
る効果がすごく高まり、持続的に均一に適期に発
揮されます。囲い込むことにより本格的な稲
作技術になったわけです。

合鴨水稲同時作の技術的特性は、稲作と畜産を
同時共栄的にするということです。二つのもの
を同時に生産していくという技術のあり方は、す
ごく特徴的だと思います。トヨタが自動車と一
緒に洗濯機を同時に作ることはありません。共
栄関係を持ちながら二つのものを同時に作るこ
とはありません。でも、自然の生態系はそのように

なっているんじゃないでしょうか。すべてを生かし合っていていくというあり方です。合鴨のいる風景はすごくいいのです。田植えをしたら、すぐ田んぼに合鴨を放したくなります。私は田んぼの合鴨を見ると元気になります。みんなは合鴨を見ると心が和むと言います。本当にそうですね。

萬田先生から教えていただきましたが、家畜の在り方として用畜、役畜、糞畜という三つがあるそうです。今の家畜は用畜に特化しています。ケージの鶏を想像していただきたいのですが、狭いところで飼われて卵を産むことだけに特化されています。豚や牛もそうです。しかし、合鴨は広い田んぼで自らの持つあらゆる能力を自由に発揮しながら、生き生きと生きています。生きていくこと自体を喜んでいるようです。家畜福祉の原点です。人間はその姿を見て癒やされるのではないのでしょうか。

しかも、それが家畜として、家のすぐ近くにある田んぼに登場したということに大きな意味があります。家畜の再来です。今、農家には家畜はいません。人里離れたところにしかいません。以前は鶏が庭を走り回っていました。

合鴨効果

合鴨には雑草防除効果や害虫防除効果など多くの効果があります。近年、オリンピックみたいに4年ごとにウンカが大発生しています。ウンカは6月末から7月初めに、中国の南の方、華南から日本に飛んできます。中国にはベトナムの红河デルタから飛んでくるのですが、中国で高収量

米を作るようになり、たくさん農薬を使うようになってから、ウンカが余計に日本に飛んでくるようになりまし。中国での農薬で生き残った選抜チームが日本に飛んでくるのです。日本では箱施薬と言って田植え前に苗に農薬をふるのですが、生き残ったウンカにはそれが効かないようです。合鴨を放った田んぼはウンカの被害はほとんどありません。雑草防除の効果だけがよく



言われますが、それだけではなく合鴨は素晴らしい害虫防除の能力も持っています。みなさんもお気づきでしょうが、合鴨はこれまで邪魔者だった雑草や害虫を資源に変えるのです。これらを食べた合鴨の血となり肉となり、その糞が稲の養分になるのです。稲作2、000年の歴史の中での大転換だと思っています。また、合鴨が稲をつつくことで刺激を受けて、分蘖(ぶんけつ)が促され茎が増え、その1本1本が太くなります。これは近代的な稲作技術にはないことです。動物と植物が触れ合うことでこのような現象が生まれるのです。まさしく生き物の持つ能力です。合鴨はジャンボタニシも食べます。ジャンボタニシは外来生物で、水深の浅い水田には天敵がないので異常繁殖します。合鴨はこれをどんどん食べて美味しい肉に変えてくれます。

生物多様性

次は生物多様性です。地球が美しいのは生物多様性があるからだそうです。本当にそう思います。1950年代にはナマズやフナ、ドジョウやエビがこの田んぼにもいましたが、近年は見られなくなりました。今と昔では田んぼの生き物が全然違います。今の田んぼには生き物があまりいません。うちでは今でも2枚の田んぼにナマズが産卵に来ます。うちでは田んぼにドジョウも入っていますが、ドジョウを入れると、なぜかフナが増えてきます。合鴨の田んぼには、20センチの四角の中にイトミミズが144匹いました。カモが糞をするとそれをイトミミズが食べ、そのイトミミズを鴨が食べ、その糞でま

たイトミミズが増える、という面白い生態系が出来上がっています。

生産力の多様性

次は生産力の多様性です。田んぼはコメだけを作るところでしょうか？ 私が子どもの頃は三角形の田んぼがありました。田んぼの形や大きさはいろいろでした。高低差もあって畦に柿の木が植えてあったり、クチナシがあつたりいろいろありました。今は基盤整備されて100m×30mの四角な田んぼばかりになって、全然面白くありません。この単調な空間を壊すために私は畦にイチジクを植えています。9月の私の田んぼでは稲が穫れ、イチジクが穫れ、カモは大きくなって、ドジョウも獲れます。これが同時作の素晴らしさです。普通の田んぼでは稲しか穫れません。1枚の田んぼでこれだけのものが同時に採れ、ご飯とおかずが同時に穫れるのです。

もう一つ、伝統農業の基本原理は輪作です。私は稲作が終わったら、水田輪作でいろいろな野菜を作ります。野菜を作るには田んぼが乾く必要があり、トラクターで深さ40cm、幅10cmの溝を3mおきに掘って、不透水層を破碎し、水の縦浸透を良くします。ちなみに昨年作付けは、合鴨水稲同時作が7・3ha、有機野菜が3ha、小麦が2・5haで、他に合鴨の雛4,000羽を孵(かえ)して1,400羽使っています。あと農産加工で味噌、漬物、酢、ソース、餅などあらゆるものを作っています。要するに家族が食べるあらゆるものを作って、それを消費者にも届けるのです。

小農の豊かさは何かというと、それは多様性にあると思います。経済的安定性のためにも多様であることが大切です。一つのものだけを作って生きていける時代ではないようです。近くのスーパーにコーナーを作ってもらい、野菜を売るようになって気づいたことがあります。それは野菜の質の違いです。小農とか有機、家庭菜園などで手間暇かけてじっくりと作られたものと、ハウスなどで大量に短期間に作られるものとは全然品質が違うようです。効率についてはよく言われますが、実は質の問題もあるのです。消費者がそこを分かってくれるかどうか分かりませんが、小農が生きていく一つの道がここにあると思います。

うちの野菜を紹介します。まずネギ。鴨ネギという言葉がありますが、旬のネギを鴨肉と一緒に食べると、本当にこの言葉の意味がわかります。長男と次男が帰ってきて、今一緒に作っています。ジャガイモとタマネギの裏作の面積を彼らが増やしました。あとトマト、ショウガ、孫のために作るスイカも……。昔は「レンコン以外なんでも作ります」と言っていました。最近レンコンも作っています。レンコンは水生植物で本当にいいです。合鴨は隣接した水田とレンコン畑を行ったり来たりしています。花が咲いたら切り花として消費者に届けると喜んでもらえます。長期間、収穫でき、収益も上がります。

小農には小農の技術があるのではないのでしょうか。輪作と同時作を組み合わせると、田んぼの多様な生産力、可能性を引き出すことができます。多くの人が稲単作、イチゴ単作などで輪作などし

ていないのではないのでしょうか。輪作と同時作を組み合わせることで、限られた土地の総合的生産力は上がり、多様になります。地球の限られた耕地で生産力を上げていくためには、この取り組みを追求することが非常に重要だと思います。

少力化

有機農業の最大の課題は何かというと、少力化です。なかには有機農業は少力化などしくない、昔ながらの方法でやればいいという意見もあります。しかし、私は「百姓百作」をしていますので、野菜も植えないといけないし、田植えもやらなければいけないし、カモの雛も生まれます。こういう現場では少力化が大きな課題です。人間の労働力を増やす、機械化をする、もう一つはアイデアで全体を見直す。この三つしか方法はありません。

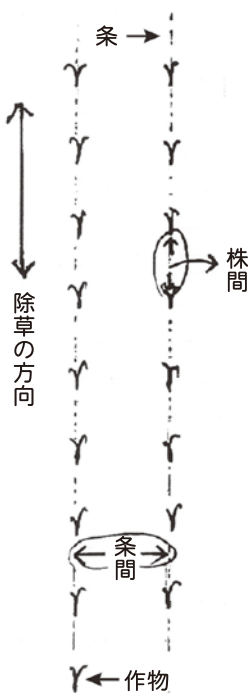
アイデアで見直した例を紹介します。7・3haの田んぼで毎年、電気柵を張ったりするのは大変でした。ある時からこれを張りっぱなしにすることにしました。永年設置です。これによつて規模拡大ができるようになりました。

次は稲作の少力化です。少力化とは大型機械や農薬を使わないで、自然の力を合理的に利用することです。少力化こそ小農の技術ではないかと思っています。

その一つが直播きです。田植方式は手間がかかります。家族総出で種まきして苗を作って、田植えまで管理しなければなりません。しかし、直播きだったらこういう作業はしなくていいのです。乾田で生えた雑草は乾田で除草する必要が

ありますが、条間は簡単です。なぜかという条間には作物がないからです。問題は作物と雑草が隣接している株間の除草です。

図1 条間と株間

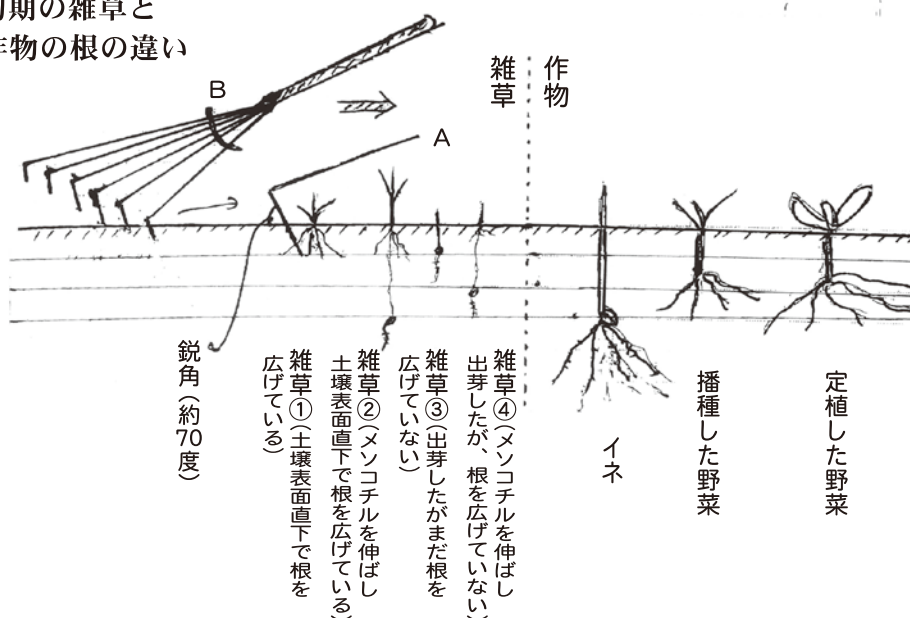


乾田直播き

2003年から乾田直播きと合鴨農法を結合してやってきたのですが、水がないので合鴨が活躍できない乾田で、いかに株間除草をするかということを考えてきました。雑草防除の技術を考えるとき、防除の方法を考えると同時に、雑草の生態も考えないといけません。一番の問題はヒエです。稲は深さ2〜3 cmのところからタネを播きます。湛水状態ではヒエも2 cmより深いところからは芽を出しませんが、乾田では深さ5、6 cmからも生えてきます。芽が伸びてきて地面に出ると、根は必ず土壌表面直下から下りるんです。稲のタネがある3 cmと土壌表面直下、この根の位置の違いに着目しました。この部分(土壌表面直下)を除草すれば、ヒエだけが取れます。そこで、

専用の除草犁(じよそうすき)を開発しました。フォークのような除草犁で、ヒエの根を掻いていく仕組みです。問題はこの犁が時々深く刺さり、土を動かして稲を倒してしまうことです。除草したあとは、稲が水没するまで深水にします。そして、鴨を放します。

図2 初期の雑草と作物の根の違い

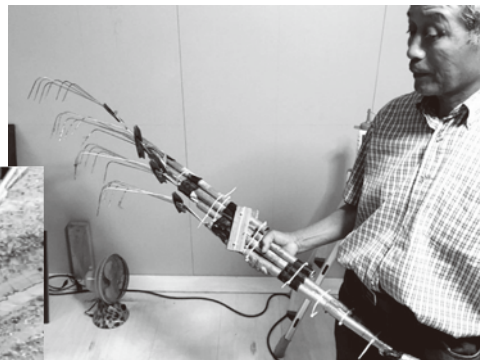


ホウキング

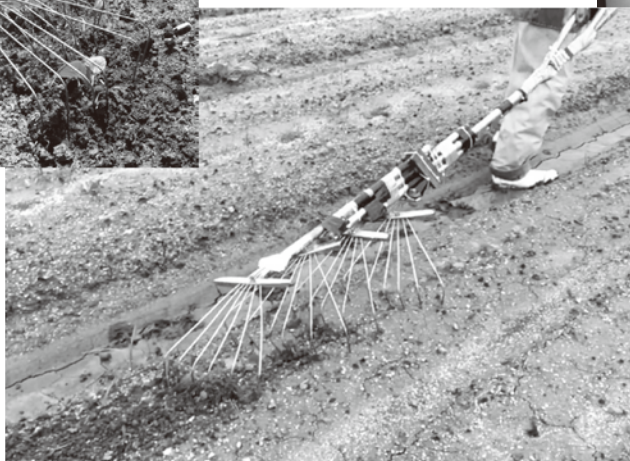
2016年2月、埼玉県であった農水省とみのる農機が共同開発した水田除草機の発表会に呼ばれました。すごい技術でした。このままだったら、今自分がやっていることも飲み込まれてしまうのではないかと。帰りの新幹線の中でもずっと考えていました。そして、たどり着いたのが金属製の松葉箒を使う方法です。名前は「ホウキング」。箒にingをつけただけです。イギリスの理論物理学者ホーキング博士とは関係ありません。野菜の株間は今までは手でとるか、三角鋏を使って除草していました。条間の除草は機械化できるが、株間は機械化できませんでした。

ホウキングを引いていくと、松葉箒の先が上下左右に揺れるんです。しかも、バネ鋼の復元力で地中に深く入り込むことなく、株間の草を抜いていきます。針金の間隔は6 cmにしています。1 cmぐらいにすると除草効率は上がりますが、野菜が傷んでしまいます。そして、お互いを補うように4連で配置することで草が抜かれていきます。このホウキングを使うと、100 mの株間除草が1分で終わります。手で除草したら2時間以上かかるでしょう。このホウキングの作り方は『現代農業』(2017年5月号)で発表しました。この松葉箒を使う手作りの方法なら、世界中の小農が応用できるでしょう。実はこの作り方をインドの人に教えましたが、インドには松葉箒がないと言われました。しかし、自転車のスポークを曲げて作るそうです。オープンイノベーションです。違う条件の所に技術を伝えると、こちらとは

違ったことを考えることになります。これを相互に交流することで、アジア共通の技術が出てくると思います。



話は戻りますが、ホウキングは最初小麦から始め、次に直播きの稲で試しました。その後、秋冬野菜でも試してみました。キャベツ、レタス、ホウレンソウ、コマツナ、ネギ、タマネギ、ニ



ラ、ダイコン、カブ、ニンジン、ゴボウ…。野菜の形は実に多様です。その多様な形でホウキングをしてみても、小麦や稲の時には気づかなかったいろいろな事が分かりました。こうした野菜で得た知見を、翌年の小麦や稲で試しました。ホウキングが少し洗練されました。これもオープンイノベーションですかね。

合鴨家族

有機農業をする目的は、家族が食べるおいしく安全なものをつくるためです。そして、家族で働くことです。昨年は孫のためにもあって2,000本のイチゴを植えました。イチゴの旬は5月です。5月のイチゴとクリスマスマスのイチゴは全然味が違います。多くの人が野菜の旬を忘れてしまっているのではないのでしょうか。旬に食べてこそ、野菜はより美味しいんです。小農は自分のために作るのです。スローライフという言葉があります。本質はスロー・イズ・ビジーです。本当に美味しいもの、本当に安全なものを食べようとすれば、自分で作るしかないのです。

次男は結婚式はしないと行っていましたが、家でやったとしてもいいということ、昨年11月、家でやることになりました。そしたら、村の年寄りや親戚も来てくれて「昔はみんなこんな風にやっていた。冥土の土産ができた」と喜んでくれました。結婚式も商業化されています。そうしないで、自分たちでやればできるんです。そういう文化や暮らしの面も考えていかないと、農村は続かないんじゃないかと思えます。村や地域がなくなれば、わが家の有機農業の持続も難しく

なるでしょう。水路の維持管理はだれがするのでしょうか。一番、重要なのは日本のムラが持続していくようなことを考えることです。昔とは社会の状況がまったく違います。グローバリゼーションの中でこれから先、経済の成長も期待できません。今はハードランディングの時代です。落ち着くまで時間がかかるでしょう。その間をどうするかという問題が私たちの前にあり、その一つに小農の問題もあると思っています。



特別報告

「忘れられた人類学者」

〜エンブリー夫妻が見た「日本の村」

元西日本新聞記者・ジャーナリスト

田中一彦さん



今から80年前、昭和10年に熊本県の球磨郡須恵村、現在はあさぎり町須恵というところに、米国の社会人類学者ジョン・エンブリー

という人が奥さんのエラさんと一緒に1年間滞在して、本を2冊残しました。夫のエンブリーが書いたのが「日本の村 須恵村」、奥さんが書いたのが「須恵村の女たち」で、両方とも翻訳されています。僕が書いた本はこの2人を紹介するものです。2人は農そのものにはあまり触れていないのですが、村の暮らしを詳しく述べている点で、小農ともまんざら関係がないわけではないと思いますので、2人の仕事の話をさせていただきます。

実は一昨年、徳野先生が現地でエンブリーと須恵に関するシンポジウムを開かれました。また、ある会合で山下惣一さんにお会いした際、自分は3年間、須恵に行ってエンブリーについて調べているという話をしたら、「エンブリー、知ってるばい」と言われました。失礼ながらさすが山下さんと思っただけです。

ジョン・エンブリーが須恵村に入ったのは27歳シカゴ大学の大学院生で、博士論文を書くためでした。社会人類学という分野の研究者で、日本で

いうと農村社会学ということになるようです。1年間、須恵村に滞在して、その記録を残して本を書きました。戦前、日本の農村についてトータルに書いたものとしては最初で唯一の本です。

では、なぜ私が新聞社をやめたあと須恵村に行って3年も住んで本を書いたのか。実は10年ほど前、ブータンに関心があったので3度ほど行ったことがありました。ブータンはすごく貧しい国です。しかし、「貧しいけれども世界一幸せな国」と当時言われていました。なぜだろうかと確認しに行ったらわけです。ちょうどその頃、「須恵村」を読み、魅せられました。そうしたら、エンブリーが書いた80年前の須恵村の風景、様子が今のブータンに本当にそっくりでした。ブータンに1週間から10日間ほど行って調べると40万円ぐらいかかる。しかも、長い時間はいられない。だったら、80年前の日本の田舎がどうだったのか、そして今80年たってどう変わったのかを知る方が、意味があるんじゃないか。しかも、九州だということ、取材対象を須恵村にシフトして、2011〜2014年の3年間、住んで本を書いたというわけです。

「日本の村 須恵村」と「須恵村の女たち」。この2人の本はまったく違うんです。夫の本はやはり学術書です。分析がそんなにされてないという批判もあるのですが、一般的に学者や研究者というのは、祭りなら祭り、信仰なら信仰、あるいは贈与なら贈与という風に、研究を部分的にそれぞれ深めるという傾向があるんですが、エンブリーは村の暮らしをトータルで書いている、その面白さがあるんです。そしてエラさんの方は、10歳から日本に住んでいたものだから、日本語が

ペラペラでした。村の女性たちの中に溶け込んで、言うなれば女性の井戸端会議を書いている。分析なんか何もしていません。暮らしの悩みだとか、噂話だとか、悪口だとか、それがふんだんに生の言葉で綴られている。

去年なくなった哲学者の鶴見俊輔は「本の後ろにもう一つの本が」という書評の中で、この2冊は合わせ読むのがいいというようなことを書いています。僕もまさしくその通りだと思います。エンブリーが書いたこととエラが書いたものには重なる部分がありますが、私もそこを合わせながら書いた。また、村の暮らし全体が書かれているのですが、そこに女性からの視点も含めて著した、というのが今度の私の本です。私の本は、直接は触れていないけれども「暮らしの時間」というのが根っこにあるテーマだと思っています。先ほど橋口さんの息子さんがドイツで農業に目覚めたという話がありましたが、私もフランスに3年ほどいて、そこでフランス人の働き方、暮らし方に日本人との違いをすごく感じました。この経験がブータンに興味を持った一つの理由にもなっています。その前には新聞社で「食卓の向こう側」を担当して、食というのはすごく時間と関係があると感じていて、ずっと時間という視点でエンブリーの本も読んでいたんです。

エンブリーの本は「協同」がテーマになっています。英語では「コオペレーション」ですので、協力、助け合いということなんです。村の暮らしは協同なしでは成り立ちません。村そのものが協同でもありません。協同ってというのは助け合いですから、心の問題がまずあるんですが、村の中には組というものがある、世話役がいる。このような



村の仕組み、システムの中に心の問題が制度化されている。それがお祭りだとか、協同行う田植えだとかいろんな実践に結びついている。心とシステムと実践が完全に結びついているのが協同だということを、エンブリーを読みながら思いました。私もそれを本のテーマにしています。

研究者は村の暮らしぶりを見て、それを分析して協同という言葉を使って説明するのだけど、当時の村人が協同という言葉を知ってるはずもありません。ところが、須恵に行つて初めて知つたんですけど、この協同を意味する「はじあい」という言葉があつたんですね。現地では「はじゃあ」と言う。エンブリーの時代にもこの言葉は使われていただろうと言われています。この言葉は

須恵にしかない。須恵だけの言葉として使われてきた。言葉というのは日常的に使われなければ忘れられて行くものですが、須恵ではこの言葉が今でも使われている。これは村にすっかり協同の精神が受けつがれていることを示しているんだと思います。現地ではこの「はじあい」という言葉を知つて、まさにこれしかないということ協同というテーマになっていったわけです。

照葉樹林文化の源流はブータンだと言われていますが、日本と似たところがたくさんある。顔つきも衣服も似ているが、一番似ているのが助け合いの文化です。ブータンの人たちは、自分だけが幸せになるというのにはあり得ないと言っています。お寺でお祈りをしてる人に、何をお祈りしているのかを聞いて回つたんですね。日本では息子が大学に通りますようにとか、交通事故に会いませんようにとか、自分あるいは家族のことなどを祈りするのでしようが、ブータンでは他のみんなのために祈りしているという。みんながそう言うんです。要するに、みんなの幸せというのがないと、自分の幸せもないということなんです。おそらく、エンブリーが書いた須恵村の協同というのは、須恵村の中にこのブータンのような暮らしを見たということだと思っています。

エンブリーが取り上げた協同には、お祭りと一緒に酒を飲むというのもあり、頼母子講などの「講」、また「組」といろいろあるのですが、その中で面白いのは「贈答」、贈与論ですね。ものをあげたり、もらったりするという助け合いの一つです。エンブリーはその贈与を11項目に分類しています。その中で二つ、ものすごく面白いと思つたのがありました。一つは「盃」と書いて

あつて、盃のやりとりです。西欧では盃のやりとりはしないわけです。「贈与論」を書いたフランスの文化人類学者マルセル・モースは、贈与には三つの義務があると書いています。一つは相手にあげる義務、それを受け取る義務、それからお返しをする義務です。盃のやり取りが贈与だということか、よく考えたらこの三つの義務が同時に行われているわけです。もう一つ、11項目の中で最後に書いているのが「談話」、スピーチです。スピーチが贈与とはどういうことでしょうか。今、私もここで話していて、みなさんに聞いていただいています。これも贈与、贈答の關係になるということです。エンブリーは基本的に日常会話そのものが贈与、贈答だとしています。「おはよう」という朝の挨拶、季節の挨拶、その言葉のやりとり、それがまさしく贈与、贈答だということです。そういう關係がお返しをする、感謝することによつてずっと続いていく、まさしく贈与文化です。今の社会は貨幣、お金を介して商品やサービスをやりとりする等価交換ですよ。これだと支払つた時点で人と人の關係が終わつてしまふ。ところが、贈与交換だと受け取つた感謝や優しさを相手、または次の人にまた渡してずっと続いていく。このように人の關係が続いていくのが村の暮らしでした。

私が最初に訪れてからのこの10年間は、ブータンが貧しさから脱して近代化しようとしている最中だったんですね。GNPのP(プロダクツを生産)をH(ハピネス)へ変えてGNHへ、国の豊かさはかる指標を「物」から「幸せ」に変えて、真に豊かな国を作ろうとしてきた。その近代化の過程というのは、まさに80年前の須恵と同じで

した。エンブリーが書いているのはその変容の過程ですが、当時の村には近代化する前、江戸時代の前近代の暮らし、文化が残っているというところを、本当は書きたかったのではないかと思えます。そうした暮らし、文化はやがて失われていくわけです。失われていく理由は二つあって、一つは国による管理、統制。もう一つは産業資本主義の浸透です。つまり、貨幣経済と機械化ということとです。80年前というのはちょうどその過渡期でした。この二つの変化の波の中でエンブリーが見たのは、「美しいもの」という表現をしていますが、失われようとしているけども、しぶとく残っている前近代の村の暮らしでした。

須恵村は80年前と同じく、14部落からなっているんですが、合併してあさぎり町須恵になった今でも生活の単位が部落ごとなんです。80年前と変わっていない、動いてないというのは凄いことです。エンブリーが間もなく失われるであろうと書いた、「組」や「ぬしどうり（世話役）」といった部落の制度が、今も実は残っているんです。エンブリーの見立てにかかわらず、今も残っている。このように、村の暮らしは根っここのところで変わっていかないのだと思います。

この本で書きたいことが二つありました。一つは「日本の村 須恵村」と、「須恵村の女たち」という2冊の本を紹介することによって、どうもうまくない変わり方をしているんじゃないかと思える今の時代にあって、エンブリーが書き残したもののの中に、今から生きていくヒント、指針になるものがあるのではないかと思ったこと。もう一つは、エンブリーの評伝的なものが書きたかったのです。これまで、エンブリーについて書かれ

たものがなかった。研究はそこそこされているんですが、ちゃんとまとめて書かれたものがなかった。

今、続編を書いています。戦中、戦後にエンブリーが書いたものが素晴らしいんです。今のトランプ大統領とかフランスのルペン、日本では安倍政権を思い浮かべますが、エスノセントリズム（自文化中心主義）に対する徹底した批判です。彼は須恵村からアメリカに帰って、42歳の若さで交通事故で死ぬまで、ずっと戦争の渦中にいました。そのなかで書いたものはすべて日米戦争に関するものです。そして、一貫してアメリカを批判しました。アメリカの自文化中心主義を批判し続けました。その原点は日本にあったと思っています。須恵村の協同、はじあいの暮らしの在り方を1年間追って、実感した。その体験が後の戦争批判につながったのではないかと思っています。

エンブリーは1936年（昭和11年）の12月7日に日本を離れますが、その船の中で書いた日記の最後に次のような言葉が残されています。ちよつと読ませていただきます。

「須恵の暮らしは厳しい。朝は早く、激しい肉体労働がともなう。しかし、焼酎があり、たくさんの焼酎を飲める祭りではいっばいの陰暦の暦がある。暗い夜々があり、魅力的な娘たちがいる。月光が、美しい山々があり、そして年をとつても話ができる古い友達がいる。私は球磨郡の魅力を理想的なものと考えてもいいと思つた」。

これには、日本を離れる時の感傷もかなり含まれていると思うのですが、とてもエンブリーの心情がこもったいい言葉だなと思います。どうもありがとうございます。



共同作業「かつたり」による
須恵村の田植え
(1936年)

共同作業「フコ」による
ブータンの田植え
(2008年)



須恵村の少女(1936年)

子守りをするブータンの少女(現在)

質疑応答

〔Q〕：川口さんに、年会費の使い道を。

川口：収入としては年会費を含めて500万円ぐらい。経費は300万円くらいかかる。ほかに地域通貨にかかるお金が120万円。あとは機械の更新のための積立などです。

〔Q〕：行政からの補助金はないのか。

川口：補助金はない。

〔Q〕：川口さんに、募集の方法と参加者はどの辺りから。

川口：募集は初めのころ、新聞に載せてもらって、かなり集まった。その後、7割ぐらいがリーダーで毎年来てくれる。残りは口コミで応募してこられる。会員はほとんどは福岡市内。地元糸島市内からの参加は3割ほど。

〔Q〕：古野さんにお尋ねします。現在は福岡市で働いています。長崎で農業している父親に、自分も農業をやりたいと相談したら、儲からないからやめろと言われた。これから就農するに当たって、収益を上げるのも大事な点だと思う。誰が農業を担うのがいいと思うか。また、収益面についてどう考えているのかお聞きしたい。

古野：なかなか難しい問題ですけど、誰が担うかというのは、おそらくどこでも同じだと思う。あなたがしなければ、おじいさんの代、その前から続いてきた農業はそこで終わりですよ。それをどう考えるかということ。収益に関してはこれから先、どうなるかわからない。ただ、それはどの仕事でも同じではないか。ちなみにうちの

研修生は、有機農業をする人でないと受け入れられないようにしています。

〔Q〕：大分県の大山町から来た。自分も兼業農家で主人と一緒に野菜のハウス栽培などをやっている。亡くなった母からは絶対に農家に嫁に行つたらいかん、化粧水1本も買えないとずっと聞いてきた。今、夫と一緒に農業をしていると、まったく違っていた。古野さんの話で感動したのは、奥さんの写真がどれも笑っている。息子さんもお孫さんもいて、そのことをどうとらえるかだと思つた。そんな風に見えるお嫁さんがいて、自分でいろいろ工夫するのを見ているお子さんたちがいるのではないかと思つた。奥さんのことについて、もう少し聞きたい。

古野：私は家内に笑われてはいます。農業が一番いいところは家族で働けることだと思う。今の社会はそういった普通なことができなくなっている。さっきも話したが、農業は自分がすること自体に意味があると思います。自分の頭で考えて決断する。私は、おいしいものをつくる。そのために技術を工夫する。そのことに意味がある。

〔Q〕：合鴨を使っているということだが、700羽とか1,000羽とかいう数をどのように回収して肉にしているのか。それと、田中さんにお願がある。去年、ブータンの人が6人ほど民泊に来た。なぜ世界一幸せな国なのかと聞くと、まさに田中さんと同じことを言っていた。こういう文化がまだ世界にはある。日本にも以前はあったんだと思う。農家の人がこういう考え方を忘れてきているのではないかと思つている。ぜひ、もっと情報発信をしていただきたい。

古野：いくつかあります。7・3haの田んぼに合鴨を放しており、8月いっぱい捕まえますが、二通りあります。捕まえるために狭い空間に追いつむ、それを研修生、家族総出でやる。もう一つは、網をW型に張る工夫をしました。鴨はWの真ん中から入っていくのだが、えさを何日かやらないと、先端から中、広いところに入つて出られなくなる。それを捕まえるのはたいした作業じゃない。処理は久留米の業者にお願いしている。カモ肉はおいしいので、ほぼ全部売れる。

田中：2007年と2011年、ブータンに行つて西日本新聞で2回連載をしている。ブータンから国王夫妻が来日したときに、メディアも一時的に取り上げたが、すぐ冷めてしまった。そういう意味では継続的に発信して行く必要があると思う。日本GNH学会というのがあり、その役員もしており組んでいきたい。オーガニックコットンで須恵で交流したこともある。幸せをどこに求めていくのかという意味でも、今後も交流は続けていきたい。

氏原（高知・大豊町）さん：全国でも有数の高齢化した町から来た。大学職員からUターンして11年目。大学を卒業したカップルが農業でチャレンジするということで集落に入ってきた。結婚式も集落で挙げた。もう1人、農学部を卒業した女子学生も3年間の期限付きで入ってきた。地元でパートナーが見つければ集落に定住すると思う。私たちのところでは、地域の担い手をどうつくるかで格闘している。言葉として小農はいいが、本当に地元で農業をしながら生きていくための提言をもっとしてほしいと思う。中山間地で

農業をやるとどうしても補助金頼りになる。ここをどう克服していくか、という提言があるのではないか。

〔Q〕：就農13年目の有機農家である。同時に大学の方で世界の小農について研究もしている。シンポジウムのテーマが「小農こそ世界の流れ」ということだったが、海外には日本よりも厳しい状況にいる小農がいる。古野さんは様々な小農の技術を海外にも伝えていて、興味深かった。ばらばらに話されていたが、まとめて話をうかがえれば。日本の小農の特徴、技術は海外でも有益でもあると思うのだが…。

古野：日本の小農の特徴と言われたが、世界中の農民は小農だと思う。日本の中だけで考えるのではなく、アジア、世界の小農ということではなく、アジア、世界の小農というところで考えるともっと楽になると思う。どこも家族で農業をしている。韓国などでは地域、集落単位で取り組んでいる。バングラデッシュでもインドでもそうだ。アジアを眺めると日本の昔が見えるような感じがする。日本がアジアに教えるということではなく、有機農業や持続的農業などでは、むしろアジアから学ぶことが多いのではないか。歴史の中で学ぶ視点が必要ではないかと思う。

〔Q〕：祖父の代から続いている農業を受け継ぐと、就農して1年。出会う生産者がみんな素敵に見える。農業をしている人の在り方を深く考える。そこで、みなさんがこれまで会ってきた農業者で、素敵だなと思う人がいれば教えてほしい。

川口：私自身は農家ではないが、妻のふるさとが農家。自分たちで食べるものは何でも作っている。素晴らしいと思う。

立花：亡くなったが進さんという人がいて、兼業農家でものすごくパワフルで、地域のこともやっていた。

古野：大まかに言えば、私より年上で一生懸命、農業してきた人には学ぶことが多い。

田中：須恵で言うとなんかいる。田舎では誰かをほめると誰かをけなすことになる。個人名は控えたい。エンブリーが山の部落と書いていて平山部落に、若い人が結構、帰ってきている。ここに行けば、何軒か頑張っている農家がある。

〔Q〕：川口さんに。会が農地を借りる仕組みを教えてください。まとまった農地をどうやって得られたのか。それと、収入は。農家は生まれたのか。

川口：農地を借りるのは、地元の人々が農地を借りて、私たちが作業委託されている。ただし、借地料として反当たり10,000円を払っている。農地がまとまったのは、ここ5年くらい。地元でUターンする人たちが戻ってきたこともあって、作業がしやすいように地元で調整してもらった。農家になった人はいない。事務局としては人件費は出せない。事務局メンバーには10万円分の農産物でお返ししている。



講評

熊本大学名誉教授・徳野 貞雄 副代表

それぞれの報告にコメントさせてもらって、まじめに替えたいと思う。



担い手問題

で川口さん。

川口さんの活動は私的なボランティアの活動だが、農政や普及所の活動とも大きく関係している。

普及所等の活動は、だいぶ変わったと思う。これまでに、普及所では生産技術の普及などを中心でやってきた。農業の現場では、農地、技術、

経営など多くの課題があるなかで、現在の最大の問題は担い手がないことである。この担い手問題に普及所関係者が具体的に取り組み始めた。

これは大きな変化だ。いろいろなパターン、やり方があると思う。担い手づくりの中でも、田縁プロジェクトみたいに、都会の人々を農業に巻き込んでいって農の魅力に触れてもらい、消費者と農をつないでいくというパターン。これから非常に大事な取り組みになると思う。この活動は、すでにかなりの所でやられている。

次に体験型の農園。これまでの市民農園は農地を貸すだけで、結果、作物があまり作れない人も多かった。これに対し、プロである農家がきちっとついて技術指導もして、ちゃんと作物が作れるようにする農業体験型農園。そして、農家にもレクチャーの指導料が入る仕組み。川口さんはこういった新しい仕組みの農園を作り、中心的活動もしていた。

そして、消費者から「プロ的」な農家も生まれ始めている。もともと兼業で仕事の片手間に田んぼや畑を作っていた人が、定年退職を機に本格的に始める。また勤めはしているが、どうも農業の方が好きという人が始めるといったケースで、こういった人たちが新たな担い手になってきている。川口さんがやっていることを眺めてみると、このように整理できるのではないか。

集落問題で立花さん。立花さんの話で一番面白かったのは、立花さんの集落はずっと世帯数は変わらないけど、人口が減少しているということ。これはものすごい重要な話で、現在、各地で起こっている。この問題が日本の集落問題、特に担い手や人口問題の出発点だ。人口が減っている原因は簡単な話で、昔ほど子どもを産んでいないということ。増えるわけがない。70、80代の

人に兄弟の数を聞くと6人、7人いたという。では何人産んだか聞くと、多くても3人だという。若い人だともっと減る。日本の人口が減るのは当たり前。

江戸時代末期、日本の人口は3、300万人、今は1億2、000万人。無茶苦茶増えている。しかし、農家や農村では減っている。すなわち、日本全体の人口問題と農山村の人口問題は、異質であり、時には矛盾する。これは産業化による移動と長寿化による複合現象として、人間の暮らし方の変化によって起こっている。集落の人口だけでなく世帯の継承などは、人々の暮らしの変化に大きくかかわっている。だから、こういったことは今後の最重要の課題にすべき。集落を守るということや担い手の問題について、生活の変化の視点からのアプローチが、今まであまり考えられていなかった。

日本の社会で一番の変化は、60歳で死ねないということ。日本の社会でいろいろ変わったことがあるが、一番大きく変わったのは子どもを産まなくなることと、同時に60歳で死ねなくなること。85歳くらいまでは嫌でも生きる。85歳までの間をどうするのか。今までみたいに会社に勤め、貯蓄もして、幸せに死んでいけたらいいけど、会社を辞めた後もまだまた生きる。この間をどう生きるのか、その問題をほとんど議論していない。こここの部分に、農や自然との付き合いと、その担い手や仕事の意義、そこに小農の意義と存在が潜んでいるのではないかと思う。

今、田舎に住んでいる年配の人の多くは、農作業をやる、また、いろんな地域活動をもやっ

る。そういった人のほとんどが元勤め人であり、いろんな仕事をしてきた。専業農業の人は、あまりいなかった。

昔の農家は複業だった。農作業だけでメシを食べている人はいなかった。いろんな仕事をしてきた。炭も焼いたし、土方もしたし、酒も作った。もともと農業は複業なのに、専業が立派なことであるかのように、どこかで変えてしまった。

時間がないので急ぎます。古野さんが言われたのは、多様性の「面白さ」。技術の多様性、生産の多様性、経済的な多様性などに触れられた。この多様性にいちばん対応できるのは人間。また、それを最も具体的によく体現しているのは農業。農家は作物も作れるし、加工もできるし、いろんなことができる。そして、自分で自分のことを決められるのが百姓だ。古野さんはそれを面白いという。ハウキングも合鴨農法も、「面白さ」満点である。

田中さんの話で一番、興味深かったのは贈与論。須恵村には、返杯とお供えの写真もあった。あの絵にあつたように、神様にお供えをしており、その神様の先には自然がある。循環しているんですね。贈与論がああいう形で生かされることを日本の中で見つけてくれた。贈与の話からお金よりも暮らしということが確認できた。その暮らしをどう充実させるのか、暮らしの問題を考えるなかで、担い手の問題や、環境や自然、仕事にどう展開するのか。ここが小農学会の役目でもあると思う。

終わりの言葉

◆ 八尋 幸隆 副代表



が、これが全国規模になつていけばと思う。こんなに頑張っている人がいるよ、という情報を是非届けてほしい。

話のネタが尽きないくらいたくさんの話がでてきた。今回のキーワードは多様性じゃないかと思う。まだまだ知られていない農家がたくさん全国にあると思う。そもそも発起人が九州の百姓だ

